

学位論文題名

蘇軾『東坡易傳』に見える政治思想

学位論文内容の要旨

本論文は、北宋の時代背景を踏まえつつ、蘇軾の財政・軍事・官吏任用に関する政治思想が、『東坡易傳』に如何に反映しているか、万曆二十五年焦竑序刊『兩蘇經解』（『京都大学漢籍善本叢書』所収）を底本として、『東坡易傳』に見える政治思想について考察を行ったものである。

第一章では、蘇軾の父である蘇洵と蘇軾の經学觀を取り上げ、蘇軾の經学に対する蘇洵の經学の影響の有無について検証を試みている。蘇洵は、經書に聖人の道が記されており、聖人の道を実現するために「機」「権」を行使する必要があるとし、六經の中では『礼』を最も重要視し、『易』によって補完する必要があると考えていたこと、『礼』と『易』は表裏一体の関係にあり、『礼』が信用されなくなった場合、『楽』を用い、『礼』を民に強制できない場合、『詩』を用い、風俗が変化した場合には『書』を用い、『春秋』には、天子による賞罰の「権」が述べられている、と考えていたことを指摘し、蘇洵が『礼』を中心に經学觀を形成し、經書を統治の手段としたことを指摘している。

蘇洵は、北宋の政治情況が不安定であると考えて、『礼論』で、華夷秩序の回復を意識し、臨機応変の処置としての「権」や君主の心術としての「機」という概念を經学に導入したと指摘している。一方、蘇軾の經学觀は、蘇洵のように「機」「権」を重視していないが、經書を統治手段とし、『礼』を重視した点は同じであるとしている。蘇軾が、北宋が抱える問題は、国家の法制度ではなく、官僚の任用に問題があると認識していること、蘇軾の問題意識は、對外政策に関心を寄せる蘇洵とは異なり、国内に向けられていると指摘している。

第二章では、『東坡易傳』に見える軍事に関する解釈を取り上げ、夷狄政策に関する蘇軾の觀點がどのように『東坡易傳』に反映されているか、検証している。本章では、『東坡易傳』の成立について検討し、その上で、軍事思想を中心に上げ、『東坡易傳』師卦象傳・随卦上六爻辭・夬卦九二爻辭の解釈について、三蘇父子それぞれの思想を比較対照しながら、『東坡易傳』の特徴の一端について明らかにしている。

蘇軾は蘇洵の遺命を受け、蘇轍の考えを参考にしつつ、『東坡易傳』を執筆し、黄州や海南島に左遷された時期に推敲を加えているため、『東坡易傳』の師卦象傳・随卦上六爻辭・夬卦九二爻辭の解釈には、蘇轍の考えよりも、蘇軾の考えが色濃く反映されており、蘇洵の考えはあまり反映されていないと指摘し、夷狄対策に関する解釈を見る限りでは、『東坡易傳』を三蘇父子の合作と見るのは、難しいと結論づけている。父の蘇洵は、北宋が遼・西夏との間に屈辱的な和約を結び、和平を維持している情況や朝廷の姿勢に憤りを感じて遼・西夏への強硬策を主張しているのに対し、蘇軾と蘇轍兄弟は、国力を充実するために軍事行動の自重を主張したと分析し、蘇軾が『易』の解釈を通して、神宗や王安石

の夷狄対策への批判を意図していたと指摘している。

第三章では、『東坡易伝』に見える君臣観に関する解釈を取り上げ、蘇軾の臣下（官僚）観や君主像が『東坡易伝』にどのように反映しているのか、その特徴を検証している。大過卦の解釈には、上に位する強圧的な君主とその君主に仕える臣下の在り方が、小過卦の解釈には、君主と強い権勢を握っている臣下との関係が述べられているが、これらはいずれも君主と臣下の関係が不均衡な状態であり、君主が過度に強盛な状態は、君主の豪奢による国家財政の破綻や、君主の専横による臣下の補弼の欠如を招き、逆に臣下が過度に権力を持った状態は、臣下による政権の篡奪につながるもので、蘇軾はいずれについても重大な政治的危機の局面であると見ていたと指摘している。乾卦象伝や大畜卦象伝の解釈では、蘇軾が、当時の皇帝に対して、積極的に政治に関与する姿勢を求めているのに、復卦象伝の解釈では、これと矛盾する無為の政治姿勢を皇帝に要望していたことを指摘している。また、同人卦卦辞の解釈では、臣下が君主に諫言すべきときは諫言して、調和を図るのが良いとしているのに、繫辞伝の解釈では、君主に不用意に諫言することの危険性、あるいは諫言を可能にする言論環境の重要性を説いているという矛盾を指摘している。また、明夷卦の解釈では、蘇軾は、各爻ごとに様々な君臣関係を想定して、暗君が上にいる場合には、臣下が自らの徳を損なっても臣下としての賢明さを全うすることが大切であると説き、第一爻から第五爻に位置する臣下の政治的責任について言及するとした上で、君主に対する要望や臣下の諫言に対する蘇軾の考え方が、乾卦・大畜卦と復卦と、同人卦と繫辞伝と、それぞれ矛盾しているようであるが、これは矛盾ではなく、蘇軾の政治観の変化を反映していると結論づけている。蘇軾は、改革に消極的だった仁宗に対しては、君主の積極的な政治関与を求めたが、王安石らの新法党が政治の実権を掌握した神宗の治世には、旧法党の士大夫が政治的に不遇で、蘇軾も旧法党と見なされ、黄州に流謫され、政治的に不遇であったために、臣下の積極的な諫言と政治上の調和の必要性とを訴えたと分析している。これに対して、神宗の息子である哲宗が幼少であった元祐年間、哲宗の祖母である太皇太后高氏が摂政として政治を担い、旧法党が政治権力を取り戻し、蘇軾も中央政界に復帰し、元祐七年には、端明殿学士、兼翰林侍讀学士、守礼部尚書にまで昇任しているため、皇帝に無為の政治姿勢を求め、不用意に諫言することの危険性や、諫言を可能にする言論環境の必要性を訴えたと分析している。『東坡易伝』には、仁宗・神宗期に形成された君臣観と一見矛盾した哲宗期に形成された君臣観とが混在しているというのである。

第四章では、『東坡易伝』に見える理財に関する解釈を取り上げ、北宋の理財に関する新法党と旧法党の対立を軸に、蘇軾が考える理財観がどのようなものであるのか、それが『東坡易伝』の解釈にどのように反映されているのか、その実態解明を試みている。理財観の特徴の第一点は、繫辞伝下の解釈に見えるように、国家財政の節約を説いている点であり、第二点は、損卦と益卦の解釈に見えるように、為政者がまず自身の経済的利益を犠牲にして、民の経済的利益を優先する必要性を説いている点であると指摘している。この理財観は、政治改革を強行する王安石の理財観とは異なるものであり、新法党と旧法党の間の党争に於いては、旧法党に帰属するものであるが、蘇軾は、旧法党が政治の実権を握った元祐三年、司馬光が給田募役法や免役法を廃止しようとした時に、民に有益だという理由からその廃止に反対し、全ての新法を廃止するような主張をすることはなかったと指摘している。民に有益になると考えた政策を支持し、そうでないものについては、民と利を争うものとして斥けようとした蘇軾の理財観が、『東坡易伝』に反映されているとし、『東坡易伝』の解釈は、北宋の政治問題を解決するための政治的提言として捉え得るものであると結論づけている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 佐 藤 鍊太郎

副 査 教 授 津 田 芳 郎

副 査 教 授 弐 和 順

学 位 論 文 題 名

蘇軾『東坡易傳』に見える政治思想

『東坡易伝』九卷は、一般には北宋の文学者として著名な蘇軾（1036 ～ 1101）の著作とされている。しかし、その成立については、歴代二通りの見解が提示されている。『四庫全書総目』易類「東坡易伝九卷」では、父の蘇洵（1009 ～ 1066）と子の蘇軾・蘇轍（1039 ～ 1112）が力を合わせて完成させたものと見ている。また、金生楊氏『《蘇氏易伝》研究』（巴蜀書社、2002）では、蘇氏父子の共著と見なす立場から、書名を『蘇氏易伝』と変更すべきだと主張している。また、土田健次郎「蘇軾の思想的輪郭」（『中国—社会と文化』中国社会科学学会、1997）では、蘇洵が筆を染めたが未完に終わり、蘇軾が全面的に手を入れて完成させたもので、結果的には蘇軾の著作に等しいと見ている。

本論文は、北宋の時代背景を踏まえつつ、蘇軾の財政・軍事・官吏任用に関する政治思想が、『東坡易伝』に如何に反映しているか、万暦二十五年焦竑序刊『兩蘇経解』（『京都大学漢籍善本叢書』所収）を底本として、解明を試みたものである。

『東坡易伝』は、『易』に関する歴代の解釈を網羅した朱伯崑『易学哲学史』（華夏出版社、一九九五）にも取り上げられていない。『東坡易伝』に関する専著としては、わずかに金生楊『《蘇氏易伝》研究』（巴蜀書社、2002）と竜吟評注『東坡易伝』（吉林文史出版社、2002）が挙げられる。

第一章では、蘇軾の父である蘇洵と蘇軾の経学観を取り上げ、蘇軾の経学に対する蘇洵の経学の影響の有無について検証を試みている。なお、本章「蘇洵と蘇軾の経学」の第一節および第二節は、「蘇洵の経学」と題して『中国哲学』第35号（北海道中国哲学会、2007年8月）に発表した論文であり、これに第三節「蘇軾の経学」を加筆したものである。

第二章「『東坡易伝』と三蘇の夷狄対策」では、『東坡易伝』に見える軍事に関する解釈を取り上げ、夷狄政策に関する蘇軾の観点がどのように『東坡易伝』に反映されているか、検証している。本章は、『研究論集』第八号（北海道大学大学院文学研究科、2009年1月）に発表した論文である。本章では、『東坡易伝』に見える軍事に関する解釈を取り上げているが、従来、『東坡易伝』に見える軍事思想に関する先行研究は、皆無であり、従来の研究の欠落を補うものである。

第三章「『東坡易伝』に見える君臣観」では、『東坡易伝』に見える君臣観に関する解釈を取り上げ、蘇軾の臣下（官僚）観や君主像が『東坡易伝』にどのように反映しているのか、検証している。本章の第一節から第三節は、『中国哲学』第36号（北海道中国哲

学会、2008 年 8 月）に発表した論文である。ただし、本論では第四節で臣下の処世術について加筆し、君臣観の特徴を明らかにしている。

第四章『東坡易伝』に見える経済思想』では、『東坡易伝』に見える理財に関する解釈を取り上げ、北宋の理財に関する新法党と旧法党の対立を軸に、蘇軾が考える理財観がどのようなものであるのか、それが『東坡易伝』の解釈にどのように反映されているのか、その実態解明を試みている。財を民から奪おうとする王安石を蘇軾が批判したとする見解（金生楊『《蘇氏易伝》研究』第三章「《蘇氏易伝》的特色」）や蘇軾が「民を経済的に豊かにすることと富国は両立する」と考えていたとする見解（周偉民・唐玲玲『蘇軾思想研究』（文史哲出版社、1996）第七章「為国興利」的経済思想」）の妥当性を資料的に裏付けたものもとして、評価できる。

『東坡易伝』の解釈の特徴として、夷狄対策に関しては、蘇軾が、神宗や王安石の夷狄対策を批判し、夷狄への攻撃という好戦的な軍事政策よりも、北宋の辺境守備策を重視していること、蘇軾の経験に裏打ちされた君臣観が認められること、蘇軾が常に民の経済的利益を優先させる理財観を説いたこと等を、『易』の解釈を通じて具体的に検証したことは、本論文独自の成果である。ただ、本論文では、『東坡易伝』の解釈に矛盾が見られる場合に、その原因を蘇軾が身を置いた時代背景や政治状況の変化に帰結する傾向が顕著であるが、この点に関しては外在的要因のみならず、蘇軾の思想そのものに内在する要因についても慎重に吟味する必要があると思われる。

しかし、『東坡易伝』に見える政治思想について、本論文ほど詳細かつ具体的に解釈の検証を試みた研究は存在しない。本論文は易学史の研究の欠落を補う業績であり、本論文の考察により、『東坡易伝』に見える政治思想の特徴が明らかにされたことは、高く評価できる。